

清沢満之における老莊思想

渡 辺 芳 遠

一、はじめに

人間は欲求を満足させるために行動する。その欲求充足の方法は、先天的な氣質を土台とし、社会生活の中で開発された能力を意志によっていかにまとめあげるかで決定され、個人によりその方法はそれぞれ異なっている。

欲求は生来的に喚起される生得的欲求と経験や学習に依存して生ずる習得的欲求とに分けられるが、実相はそれらが複雑に絡み合い実にはさまざまな欲求がある。そして、それらの欲求は人間が生きている限りなくなることがない。一つの欲求が満足されれば、必ず新たな欲求が生じて来る。また、それらの欲求が完全に満足されることは少なく、人間はほとんど常に欲求不満の状態にある。

その欲求不満を生ぜしめる欲求充足のための障害は、自己以外の外部に起因するものが多いと思えるが、発想を転換すれば、自己の能力不相応の高い欲求を抱いていたり、客観的

にはなんら障害となり得ないものを障害と受け取っていたり、自己自身の内部に起因するものが多いとも思える。

要は、人生、欲求不満がなく、日々心安らかに、自由に楽しく過ごすことが、願わしいことである。そのためには、従来の発想を転換し、欲求充足の障害はすべて自己自身に起因すると考え、大きな絶対の存在を信じ、自己充実に努めることである——これが現在人類がさまざまな経験と思索から会得した真の生き方と思える。

そのような結論を導いたのは、清沢満之の精神主義と老莊思想を考察したからである。紀元前五世紀末から三世紀初めの中国の老子・莊子と、十九世紀末から二十世紀初めの日本の清沢満之とは、時代も民族も異なるが、不可思議と思えるほどの多くの共通点を見出し、そこに人類の普遍思想を意識した。

二、絶対無限者と道

人間が生きる拠りどころは、相対有限の金銭でも、地位でも、愛情でも……ない。絶対的根源者、究極的存在、人間の救済者（人格的存在ではないが）として、満之は「絶対無限者」を、老莊は「道」を説く。

満之は「精神主義」の冒頭で、

「吾人の世に在るや、必ず一つの完全なる立脚地なかるべからず。若し之なくして、世に處し、事を爲さむとするは、恰も浮雲の上に立ちて技藝を演ぜんとするものゝ如く、其の轉覆を免るる事能はざることを待たざるなり。然らば吾人は如何にして處世の完全なる立脚地を獲得すべきや、蓋し絶対無限者によるの外ある能はざるべし。……精神主義は自家の精神内に充足を求むるものなり。故に外物を追ひ他人に従ひて、爲に煩悶憂苦することなし。而して其の或は外物を追ひ、他人に従ふ形状あるも、決して自家の不足なるが爲に追従するものたるべからず。精神主義を取るものにして、自ら不足を感ずることあらんか、其の充足は之を絶対無限者に求むべくして、之を相対有限の人と物とに求むべからざるなり。」（明治三十四年一月『精神界』）

と述べ、さらに、

「吾人が自己心中に満足を得る模様を檢察するに、吾人は世上百般の事に當りて、不満足のために煩悶することあるも、一たび轉じて絶対無限、如来大悲の實在に想ひ到れば、先の不満足は煩悶は煥然として消散し、満足の歡喜は油然として流出するを覺ゆ。」

（明治三十四年十一月『精神界』）

と説く。また、『在床懺悔錄(三)』では、独立無限者は無限の性能を具備しており、慈悲も智慧も円満な心靈の性能も具備している、と教える。

『老子』第一章の冒頭は、「道の道う可きは、常の道に非ず。」と、まず形而上的窮極的存在として「道」を説く。

第十六章では、「道なるは乃ち久しく、身を没するまで殆りからず。」と、「道」は永久であり、それを体得した人は死ぬまで危険はない、と述べ、

第四十一章では、「夫れ唯道は善く貸して且つ成す。」と、「道」こそは何にもまして（すべてのものに）援助を与え、しかも（それらが目的を）成しとげるようにさせるものである、と述べる。

また、第六十二章では、「道なる者は万物の奥なり。善人の宝なり。不善の人の保せらるる所なり。……古の此の道を貴ぶ所以の者は何ぞ。以て求むれば得、罪有るも以て免ると曰わずや。故に天下の貴き爲り。」と、「道」はあらゆる物の隠れ家であり、善である人が宝とするもの、不善である人が護られるものである。……昔の（人が）この「道」をとるとんだ理由は何であったか、「それによって、人が求めるものを得るし、罪があつたときも（その報いを）免れる」と言われているからではないか、それ故に天下において最もとうといものとされる、と述べる。

三、絶対的服従と無為自然

欲求不満がなく、日々心安らかに、自由に楽しく過ごすための拠りどころとして、満之は「絶対無限者」を、老荘は「道」を説かれたが、それぞれの属性として、「絶対的服従」と「無為自然」が第一に考えられる。

「精神主義は完全なる自由主義なり。若し其制限束縛せらるゝことあらば、是れ全く自限自縛たるべく、外他の人物の爲に制限束縛せらるゝにあらざるべし。自己も完全なる自由を有し、他人も完全なる自由を有し、而して彼の自由と我の自由と衝突することなきもの、是れ即ち精神主義の交際といふべきなり。

而して通常の場合に於いては、彼の自由と我の自由と衝突なき能はざる如きは何ぞや。他なし、此の如き自由は完全なる自由にあらざるが故に、完全なる服従と平行せざればなり。今精神主義によりて云ふ所の自由は、完全の自由なるが故に、如何なる場合に於いても、常に絶対的服従と平行するを以て、自由に自家の主張を變更して他人の自由に調和することを得て、決して彼の自由と衝突することあらざるなり。」(明治三十四年一月『精神界』)

と、満之は完全なる自由を得るためには、すべてに服従することが肝要であると説く。

老荘思想も囚われることのない自由な自己を持つためには、意識的作為をせず(無為)「道」の働きに従う(自然)こ

とを説く。

『莊子(人間世篇)』では、「夫れ、物に乗じて以て心を遊ばしめ、已^やむを得ざるに託して、以て中を養うは、至れり。」と、そもそも物ごとの移りゆきに委せて心を解放し、人の力ではどうしようもないものに身をゆだねて、中正の立場(世俗の善惡にとらわれない)を養っていくのが、最上のこととす、と述べている。

誰でも自由は心地よいが、服従は苦痛である。その苦痛である服従を実行し、やがては服従することが歓喜となるためには、(1)絶対根源者に対する信頼、(2)万物一体の認識、(3)主体的な精進、が求められる。

(1) 絶対根源者に対する信頼

満之は「精神主義」で次のように述べている。

「精神主義は吾人の世に處するの實行主義にして、其の第一義は、充分の満足を精神内に求め得べきことを信するにあり。」(明治三十四年一月『精神界』)

「只だ夫れ絶対無限に乘託す。……宇宙萬有の千變萬化は、皆な是れ一大不可思議の妙用に屬す。……一も我等の自ら意欲して左右し得る所のものにあらず。……生死は全く不可思議なる他力の妙用によるものなり。如来は爾がために必要なるものを、爾に賦與したるにあらずや。若し其の賦與において不十分なるも、爾は決して此れ以外に満足を得ること能はざるにあらずや。蓋し爾自

ら不足ありと思ひて苦惱せば、爾は愈々修養を進めて、如来の大神に安んずべきことを學ばざるべからず。」（明治三十五年六月『精神界』）

「我、他力の救済を念ずるときは、我が世に處するの道開け、我、他力の救済を忘るゝときは、我が世に處するの道閉づ。」（明治三十六年六月『精神界』）

「私共の精神主義とは、如来の廣大なる他力に依つて、總ての事を見て行くのである。……只だ私共は、他力に依り如来の命じ給ふ所に依りて、事を爲す斗りである。」（明治三十五年六月の講話筆記、精神主義―その三―）

苦痛に感ずることも、すべて、絶対無限者（如来、他力……）の妙用、おはからいであると思えば、その苦痛は歡喜に転換する。その信頼が第一義である。

『老子』第三章では、「常に民をして無知無欲ならしめ、夫の知ある者をして敢て為さざらしむるなり。無為を為せば、則ち治まらざること無し。」と説く。人為を捨てることによつて、自然の力が現われる。自然は内在する「道」の働きによつて、そのようになることで、その「道」に信頼を寄せている。

苦痛に感ずることも、すべて、「道」の働きであると思えば、その苦痛を減ずることができる。いや、苦痛を感じる、感じないは個人の意識であつて、この世のすべては絶対根源

者（実は表現できない存在）のはからいなのである。我々はそれはからいから逃れることはできない。従つて、そのはからい（絶対根源者）を信ずることが根本である。

（2）万物一体の認識

滿之は「精神主義」で次のように述べている。

「萬物一體の眞理は、……其の説明頗る多様なりと雖も、要するに、宇宙間に存在する千満無量の物體が、決して各個別々に獨立自存するものにあらざして、互に相依り相待ちて、一組織體を成すものなることを表示するものなり。……彼の萬物は皆な我が爲に存在するものなり……『三界は皆な是れ我が有なり』……『其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり』……夫れ吾人をして最も吾人の赤心を表せしむるものは、財産の事と子孫の事とに過ぐるものなし。而して今や天地萬物が皆な我が財産たり、一切生物が皆な我が子たり、吾人は萬物を保重し、生物を愛重せざらんとするも能はざるべし。」（明治三十四年二月『精神界』）

苦痛を感じさせる存在も自己と一体であり、この世は自己相依つて一体であると考えられれば、苦痛は減じられる。

莊子はこの世を差別せず、渾然一体として考え、万物斉同を説く。善惡、美醜などの価値判断も小賢しい人間の勝手な判断であり、客觀世界の眞實の姿は無差別無対立であると考ええる。

苦痛を感じること、すべて空虚な相對的価値觀である。

大自然の中に融化し、対象と一体になると苦痛は減じられる。

(3) 主体的な精進

満之は「精神主義」で次のように述べている。

「所謂毒蛇惡龍なるものとせんも、其ものを毒蛇惡龍と見るか、毒蛇善龍と見るかは、是れ吾人の精神如何によることにして、吾人は此の事に關して充分の自由を有するものとするが、精神主義の一大要義とする所なり。」（明治三十四年十月『精神界』）「我が心機だに開展すれば、如何なる事に對しても、決して怒ることなく、常に喜び得るものであると云ふが、精神主義の主張であります。」（明治三十四年七月、講演筆記、精神主義―その二―第二回）

外物、他人にばかりこだわらず、苦悩する精神が、自己自身の内部に絶対無限自由自在な実在を発見するよう精進するところが肝要で、自由の獲得は自己自身の精進如何である。

老莊思想も主体的に自由を追求するもので、世俗や常識に對して主体的に価値の転換を求めている。小賢しい知的分別が差別を生じ、その差別が執着を生み、執着が苦悩を招いている、と説く。「無為自然」というが、まったく人為をなくすことが、反って不自然であり、自然に従う人為は当然である。

しかし、主体的精進といっても、絶対根源者のはからいで

あり、個人の精進は有限であるから、無限なる存在を信じつつ精進して、はじめて完全なる自由と安心が獲得されるのである。

四、おわりに

満之の精神主義も老莊思想も、厭世主義、逃避主義、虚無主義などではない。自己が現在生きている事実を重視する。ある意味ではともに現実的成功を求めているとも思える。絶対根源者にすべてをおまかせすることによって、現実的成功がある意味で得られるからである。

ともに、相対有限差別の現実にあつて、絶対根源者の存在を信じ、その現実を内包する絶対無限平等の存在に、主体的に随順することによって、完全なる自由と安心を求めたのである。

ある段階に到達した宗教信仰者は、宗教宗派の如何を問はず、みなこのような境地に達するものらしい。人間の欲求充足方法の到達点は、このようなことなのであろうか。

△キーワード▽ 清沢満之、老莊思想

（熊野工業高等専門学校教授）